



原田左官工業所での集合写真



左官体験

顔合わせやメールでのやりとりを通ったほか、3大学でオンラインでの協力企業視察を行

オランダ・フィンランドから招へい
社会課題に挑む中小企業視察
本プログラムは、首都圏中小企業の訪問や



堀 潔
(桜美林大学
リベラルアーツ学群
教授・副学長)

桜美林大学の活動報告

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

II 特別連載 II

第355回

◎プログラムの概要

Table with 2 columns: Day (1日目 to 7日目) and Program Content (e.g., 日本到着、オリエンテーション, 講義&ディスカッション@新宿キャンパス).

プログラムは2月27日(3月5日の7日間、
本学協定校のロッテルダム応用科学大学(オランダ)と東フィンランド大学(フィンランド)から教員・学生18名(うち1名自己資金参加者)を招へいして実施された。本学学生も参加し、日本、オランダ、フィンランドの3カ国で学び合う環境の下、日本の学生とともに多様な人材が働く環境が企業や国の成長につながるモデルを模索することを目的として実施した。

昨年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響によりオンラインでの実施となったが、今年度は対面実施が実現した。昨年度のオンラインプログラム実施を契機に、2022年9月に東フィンランド大学教員が来日し、堀教授との共同研究及び本プログラム協力企業視察を行ったほか、3大学でオンラインでの顔合わせやメールでのやりとりを通



修了式で学びの成果を共有

し、実施に向けて準備を進めてきた。オンラインでの事前研修では、プログラム概要や来日に伴う手続きの説明、自己紹介及び各国の文化紹介を実施した。さらに、来日後の参加者の主体的な参加を促し、学びの成果を最大化するため、昨年度オンラインプログラムの実施時の講義動画を活用し、事前学習に取り組ませた。また、オランダのロッテルダム大学では、その講義動画を基に、担当教員による事前学習を実施し、日本のジェンダー平等の現状に関するインフォグラフィックを作成しプログラムに臨んだ。

来日後のプログラムでは、ロッテルダム応用科学大学のコスタス・カイマキス教授によるデジタルマーケティング、東フィンランド

大学のカタリーナ・イロネン教授によるリーダーシップ、同じく東フィンランド大学のマルクス・ラーティカイネン教授によるアントレプレナーシップに関する特別講義を実施いただいた。フィンランド、オランダ、日本の学生による多様な意見を介した活発なディスカッションを通し、グローバルにビジネスを展開するための知識や視点を習得した。

また、国内企業・機関から講師にご登壇いただき、日本の事例を皮切りに、世界の少子化問題やジェンダー平等、女性の社会進出や女性起業家によるビジネス創出等に関する講演を受講し、各国の現状や課題、今後の展望に関する意見や質問、提案について活発に意見交換をした。

### ◎ プログラムの成果

本プログラムの成功に最も寄与したのは、疑いなく、企業訪問を受け入れてくださった(有)原田左官工業所の原田宗亮氏(代表取締役社長)や、ゲストスピーカーをご快諾いただいた(株)豊和(Dizings)山本美代氏(代表)、社会保険労務士法人ワーク・イノベーション、菊地加奈子氏(代表)、一般社団法人日本跡取り娘共育協会内山統子氏(代表理事)の本プログラムへの趣旨の理解と十分な準備、熱意あふれる講演、予定時間をオーバーしてまで学生の質疑応答に臨んでいただいた真摯さである。この機会できち得ることができない生の情報や熱量といったものに触れ、招へい教員・学生全員が感化された様子であった。欧州からの参加者にはポルトガルやスペイン、ブラジル、ブルガリアにルーツを持つ学生も参加していたため、各国地域の現状や課題を共有できた点がデイスカッションを活発化させる有効な要因であった。なかでも「オランダやフィンランドは(日本に比べれば)教育や社会福祉制度が充実しているかもしれないが、最近の気候変動や戦争、テロの脅威

などあつて、私たちの産んだ子どもが生きていく社会がよりよい社会となっていくかには相当な疑問がある。こんな不安定・不確実な状況で子どもを産み育てる気にはならない」と述べた欧州の学生の意見は参加者の心に強く印象に残った。

ご講演いただいた企業様からも海外の学生の視点を得たことがとても新鮮で、参考になったとよいフィードバックをいただいた。より良い社会や世界の構築に向けた一人一人の思考や行動を考えるよい機会となったようである。また、原田左官工業所での左官体験や本学学生と企業周辺を視察する中で、日本の文化や社会を直接体験し、これまでの日本に対する固定観念が良い意味で払拭されたことや、日本の清潔で礼儀正しく、秩序のある国民性や環境に感銘を受けている学生も多く見られた。

### ◎ 今後の展望

総じて、今後の双方向の国際交流を促進するために、本プログラムは大変多くのきっかけづくりをすることができたのではないかと考える。

今回、5名の本学学生がプログラム運営スタッフとして参加したが、本学学生にとっても語学学習に対する意欲向上や異文化理解の促進等、多くの良い影響がみられた。そのうち2名は今秋に交換留学予定で、1名も今後の留学を検討している。本プログラムの実施後、桜美林大学とロッテルダム応用科学大学、東フィンランド大学との間では教職員の間で相互訪問が実施され、今後の学生・教職員の幅広い交流のあり方について議論が行われた。

参加した留学生・招へい教員の事後アンケートでの満足度は非常に高く、また留学や就職で日本に戻りたいといった声も多く寄せられた。今後の再来日や相互の学生交流、研究交流に繋がることを期待する。